

## 第二章 灰の魔女

「——というわけで、魔女さんの物語はこれからも続く  
とさ。めでたしめでたし」

ぱたん、と本が閉じられると、古びたインクの匂いにおがわ  
ずかに舞った。

しばしの静寂せいじやくが孤児院の一室に舞い降りて、それでも  
僕が口を開かなかったことで、物語が終わってしまったこ  
とに気づいた子供たちは、堰せきを切ったようにわめき始める。  
「おいおいこいで終わりとかふざけてるよ」「はい続き。続

きはやく」「ちよっどー！　まだ二巻までしか読んでないよ！　四巻は？　五巻は？」「続き！　続き読んで！」「はーやーくー！」

今までじっと黙って僕の語りを聞いていたとは思えないくらいにわーわーぎやーぎやーとうるさい子供たちだった。「マクミリアああ！　はやく続き！　続き買ってきてー！」子供の誰かが叫んだ。

「うんうん。あつたらね」

「そんなこと言っつてさあ。　実際もう裏ルートから四巻入手してるんでしょ？」

「ないんだなあそれが」

「嘘うそだあ」

「悲しいことにほんとなんだよねえ」

「ねえマクミリア。魔女ってほんとにいるの？ あたし将来の夢、魔女にしようかなって思うんだけど」「年長の女の子は僕の服の袖を引<sup>そで</sup>つ張って首をかしげた。

「うん僕もよく知らないんだよね。いるんじゃないの？」「うわすごい雑」

「よくわかんないんだから仕方ないでしょー」

「そういう場面では嘘でも『いるよ』って言って希望を持たせるべきだっと思って思うな」

「じゃあ、うん。いるよ」

「嘘つきの大人、きらい」

僕にどうしろと……？

子供ってよく分かんない。

毎週末に孤児院に帰っては読み聞かせをしている僕だけれど、一週間おきに性格が豹変ひょうへんする彼らには毎回戸惑ってばかりだった。

……なんてことを、子供たちへの読み聞かせを終えたあとに孤児院の母たるシスターさまに相談したら、「それだけ楽しみにしているという事です」と、のほほんとした口調で言われた。「特に、その本はあの子たちも大好きみたいでね、妙なテンションになっても無理ないかもしれないわね」

「ふうん……」

「よければ今後はその続きを読み聞かせてあげられませんか

か？ きつとあの子たちも喜びます」

僕は自然と首を振っていた。「いや、そうしたいのも山々なんだけどね、続かないんだよね。マジで」僕が子供たちに語っていたことに嘘はない。

「元々外から持ち込まれた本なのでしたっけ、その……えつと、何でしたっけタイトルは」

「ん」

僕は本を掲げてタイトルのところに指を置く。あまり共感されないけど好きな本のタイトルを口に出すのって結構恥ずかしいよね。

「——そうそう、その続き。もしかしたら今日、港に行けばあるかもしれないでしょう？ だから買ってきて

ちょうだい  
頂戴な」

「買ってくるのはいいんだけど……でも、多分ないかも」  
「？ なぜですか？」

怪訝けげんそうに首をかしげるシスターさまに、僕は応える。  
「毎年探し歩いてるけど、見つかったためし例がないもん」  
僕は本の表紙を軽くなぞった。

これは、国の外から持ち込まれた物語。  
灰色の髪の毛の魔女が、世界中の国々を渡り歩き、ただその  
場にいた感想をつらつらと述べているだけの日記みたいな  
私小説。

孤児院で生活をしていた頃は、この本を読んで国の外  
に出ることを熱望したものだだった。

どういうわけか、魔法使いなんてものは、僕のいる国——領域都市クラウスレインには存在しないから。それこそ、祈りでもしない限り、魔法使いに出会うことなんてできないから。

で、まあ、予想通りというか、相変わらずというか。

ともかく僕は港を訪れてみたものだったけれど、やっぱりお目当ての本は見当たらなかった。

試しに港で露店を開いてるおっちゃんに片っ端から声を掛けてみたものだったけれど、結果は同じ。

「うん。無いね」「それ三巻打ち切りって噂うわさだぜ?」「それの続き? ああ持ち込まれてないな」「ねえな」「ところでこの

新作とかどうよ？ 奴隷でハーレム作る話なんだけど」  
以下略。

本を売ってる店を回り回って尋ねまくったけど、市場の  
売れ線と僕の趣味嗜好しこうが完全にズれているのか、くそつま  
らん本しか置いてなかった。なんだよ奴隷でハーレムって。  
奴隷なめてんのか。

「ぬぬぬぬぬ……！」

僕マジ憤怒ふんぬ。

というか何で一冊も置いてないの？ 一冊くらい持ち込  
んでくれてもよくない？ 需要あるのにそれを見て見ぬふ  
りして供給サボるとかこれもう商売の破綻はたんじゃない？ さ  
ては読者をなめておられるな？



こうなつたら僕自ら国の外に出向いて本の続きを買ってやりたいとさえ思ったくらいだった。

けど無理なんだよね。だから憤怒しているとも言える。今日の港には呆れるくらいに人がいて、そのだれもが金持ちばかりだった。

年に一度しか港を訪れることのない定期船は、国の外から金持ちと、外の世界の荷物を載せてやって来る。

そしてこの国に数日滞在したのち、人と荷物を載せてまた出て行ってしまふわけだけれど、そもそもこの年に一度しかない定期船に乗り込むためには途方もない金額が必要であり、そして持ち込まれた品々も馬鹿み<sup>ば</sup>たいに<sup>か</sup>高いものばかりなのだ。

よってこの日の港は金持ちたちの道楽の場と化していた。僕みたいな庶民がいればたちまち目立ちまくってしまうもので、歩いているだけで痛いほど視線を浴びているのがよく分かる。

「……………」  
いづらい…………。

結局僕はそのまま港を回るだけ回って、時間を潰せるだけ潰してから、仕事に行った。

○

「定期船のチケットは乗船と同時に本人確認があるから、

非正規の手段で入手したもののや、身分が不明瞭の者は外に出ることは叶わないわ。転売目的で買ったとしてもただのクズごみになるだけ。まあ買うだけ無駄というところね。ちなみに輸入品はどれも高いから『高い金払ったんだから美味<sup>うま</sup>いに決まってる』なんていう貧乏人根性丸出しの思考回路の連中がこぞって買ったがるけど、よその国の人間の好みに合わせたものは舌鼓<sup>したつづみ</sup>を打つほどのものばかりじゃないわ。むしろ味覚に合わないことが多いの」

港に行つたついでに買った輸入品のチョコレートをリリエールにあげてみたら、「ありがとう」と素直に礼を述べられて、そのあと「ところどころの枕詞<sup>まくらごころばな</sup>のあとに今の言葉をぶつけられたわけだけけど、何で僕怒られてんの？

というか何？　もしかして定期船のチケットを転売するために港に行っただとか思っておられる？　おいおい喧嘩売つてんのかな？

「文句があるなら返してよ。僕が一人で食べるから」とりあえず腹立つからチョコレートの入った箱を強奪した僕だった。

「ちよ、ちよつと！……食べないとは言っていないですよ」「リリエールは慌あわてて箱から二、三個のチョコレートをつまみ上げる。「ちなみにチョコレートを食べると血糖値がやたらと上がってね、シミとかシワの原因にもつながるし、ニキビができやすくなるわ。食べてもいいところがあるでないわね」

「……………」

必死に食べながら言うセリフじゃないと思うなー。

結局僕は押し負けて、チョコレートの箱を僕たちの間にあるテーブルに置きながら、ソファに腰を下ろした。

ふわりとした感触が僕の身体を支えてくれたけれど、なんだか落ち着かなかった。

働き始めてまだ三日しか経たっていないせいか、見渡す限りの景色が新鮮さをもっている。

筆、鏡、傘、壺つぼ、本、鋏はさみ、その他ジャンル不問の物たち

が、店の中には並べられている。毎日のようにそれらにかかると埃ほこりをはたき落おとしていくわけだけど、未だいまに何を売っているのやらさっぱり。

リリエールが人助けをしているってことは分かるんだけど、でも、だっただらこの店に置かれている物々は何なの？

「こいつって何屋さん？」話の流れを切って疑問をとりあえず□にできるのは新人の特権だよな。

「は？ そんなことも知らずに働いていたの？ クビにしようかしら……」

「……………」

ちなみにブラック企業では新人の特権などあってないよ  
うなものだからみんなも気をつけようね！ えへへ死にたいなあ。

リリエールは心底あき呆れたようにため息を漏らす。

「うちの店は基本的には物を売買する店よ。この国には祈りがあるでしょう？ 祈りを叶えれば、どんな自分にもなれるーというのは知っているわよね」

「うん」

リリエールはチョコレートのついた指をナプキンで綺麗きれいにふき取りながら、

「祈りはね、時には人じゃなく物にもかけられることがあるの。例えば、大事にしている人形に『生きて欲しいー』と願えば、人形の髪が伸びるようになるわ」

「それホラーだよね」

「あるいは人形が夜中にひとりごに歩き回るようにも」「それもホラーだよね」

「……まあ、そういうった奇妙な事案が起こるようになった物を引き取ったり、あるいは誰かに譲渡したりするのが私の主な仕事よ。誰かの祈りを解くのはあくまで副業。レアケースよ」

「ほほう」僕は頷く。うなずけど直後に首をかしげた。「……売買してるどころ見たことないけど」

「やめなさい」

「この店、実は繁盛してないんじゃないじゃ……」

「怒るわよ」

「というかお客さん来たところすら見たこと——」

店の扉が鐘を鳴らしながら開かれたのは、ちようど僕らが雑談に花を咲かせていた、そのときだった。



お客さんを指差しながら勝ち誇った顔色を浮かべるリリエールに対し、扉から飛び込んできたお客さんは、やや慌てきつているように見えた。

「リリエールさん！ 助けてくだされ！ 吾輩わがはいとても困つておるのです！」

肩に大きなバッグを掛けたスーツ姿の壮年男性だった。過ぎしやすい春の朝方だというのに、男は真夏の日差しの中を急いできたみたいにならずいぶんと汗ばんでいる。

「いらっしやい。とりあえずそこにどうぞ。お名前は？」  
「カジノ店、ガットショットの支配人モリスです。今日は祈りを解いてもらいに来た次第であります！」

妙なテンションの男だった。

リリエールは顧客名簿にペンを走らせた。

「要件は？」

リリエールの言葉に、モリスこと支配人が応じる。

「店に魔法使いが現れたのであります！　ぜひとも助けてほしい」

「……魔法使い？」　思わず僕は声をあげていた。

ふと気づくと、リリエールも涼しげな表情を崩していた。

「この国に魔法使いなんているはずないじゃないの」「ぴしやりと断言するリリエール。

けれどモリスこと支配人は頑かたくなだった。

「だが魔法使いが確かにいるのであります！　魔法使いの

せいで、我が店は経営が傾いているのですよー！」

必死な形相の中に嘘はないように思えた。

だから僕もリリエールも怪訝な表情で顔を見合わせた。

「……ところで今日のお客さんも解呪のお願いみただけ  
ど」

「レアケースって続くものなのよ」

「私が運営するカジノにその女が現れたのは二日ほど前の  
ことであります！」

支配人が語り、リリエールがペンを走らせながら時折頷  
いていた。

妙な話だった。

支配人曰く、魔法使いの格好をしたその女は、訪れたそ

の目、まるで他には用はないとでも言うように、真つすぐにポーカーのテーブルに座ったそうだ。

かなりの上級者のようで、堂々とした態度をしていたとも語った。

しかし若い女の子が一人で訪れるには、カジノは少々物騒な場所だった。魔女の仮装をしている彼女はなおさら、周囲の目を惹ひいていた。

だから多くの男が、彼女と勝負をしたがった。なんなら「俺が勝つたらなんでも言うのたまう」ことを聞けよな……へへへ……」とかのたま言うゲス男くんも出てくる始末だったとか。

「しかし驚くべきことに、その女はただの一度たりとも負けなかつたのですよ！ 役なしなんて一度たりともなくて、

最低でもフルハウス、ごく稀まれにロイヤルストレートフラッシュを平然と出してくるのであります！ 男どもは徹底的に身ぐるみを剥はがれたであります。払える金がなくなつて下着姿のまま店から追い出された奴もいました」

「なかなか容赦ようしやないわね。グツド」  
なぜか満足げに頷くリリエール。

なに言つてんのきみ。

ちなみにポーカーにおける役の中で、フルハウスの難度はかなり高い。ロイヤルストレートフラッシュに至っては自分で出すことはおろか、目撃することすら超希少。

つまりバケモノじみた手を使う女ということだった。

ポーカーで勝てるように祈ったのかな？

「要するに、女にかかった祈りを解けば、恐らくは店の経営状況もよくなるってこと？」

「まあ恐らくはそうなるでしょうね」リリエールも同じ結論に至ったようで、僕に頷いていた。

でもつまりこれって、女の子にあんなことやそんなことをしようとした男たちが片っ端から痛い目に遭<sup>あ</sup>ってるだけだよな。

自業自得だと僕思いますハイ。

しかしお店的にはやはり、女の子の一人勝ちにするよりも、あらゆる男から搾取したほうが得策なのだろう。

「あの女の子が現れて以来、我が店は大打撃を受けました。もはやポーカーの席には事情を知らない新参者がわず

かに座るだけ。絶対に勝ってしまう彼女のせいで、客足は遠のきつつありますでありますー！」

「事情は分かったわ——」リリエールはペンを走らせる手を止めた。

その一言と様子は、「面倒くさいけど仕方ねえからやっ  
てやるよ」というニュアンスを存分に含んでいるように見  
えて、要するに彼女が乗り気でないのは火を見るより明ら  
かだった。

だから直後に浮かべた満面の笑みも、付き合いの浅い僕  
ですら分かるくらいにまがい物だった。

「その女の子の件を解決したいのならば、とりあえず手付  
金として五千万レインを頂戴。解決したらその倍もらう

わ」

大金吹っかけて諦めあきらさせる気で満ち溢あふれてさえた。  
しかし。

「ふむ。構わん！ ちようど手持ちが五千万レインだ」  
支配人は即座にバッグをテーブルに置いて、ファスナー  
を開く。

中にはお金がぎっしり。なるほど支配人が持っていたの  
は五千万レイン入るバッグだったようだ。それ裏金じゃな  
いだろうな？

「ちっ。これだから金持ちは……」  
支配人に聞こえないように毒づくリリエール。  
乗り気じゃないにも程がある。



しかしそんな彼女に反して、僕は俄然がぜん乗り気だった。何なら今すぐにもカジノに赴おもむきたいくらいに。

「……あなたの依頼、確かに承うけたまわったわ」

テーブルのバッグを「よいしょ」と自らの足元に置いて、ため息を漏らすリリエール。

その横で、僕はひとり、うずうずとしていた。

あ、お金が傍そばにあるからじゃないよ？ マジで。

「……さて、それじゃあ行きましようか」

「おっと早速さっそくカジノ行っちゃう？ こう見えても僕、昔は

カジノで働いてたことあるから結構ギャンブルには自信が

——」

「ああ違うわよ。まずはその魔女の女の子の身元を調べる必要があるでしょう？ こういった事態の場合、まずは情報収集が最優先よ」

「ほほう」

「というわけで行くわよ」

「……どこに？」

「喫茶店」

……。

はー？

○

地味な西洋風の店構えの中で、衣擦きぬずれの音をにわかには鳴らしながら、着物の少女二人が歩いている。よく似た顔立ちをしている彼女らは、立ち振る舞いも顔立ちも、肩口のあたりで綺麗にさっぱり切り揃そろえられた髪に至るまで、そっくり。

相違点があるとすれば髪の色だけだった。

「事件でありんす？」と白髪の女の子は首を傾けて、僕の前にパフエ（ふつうサイズ）を置く。

「事件でやんす？」黒髪の女の子も同じように首を傾けて、リリエールの前にチョコレートサンデーストロベリーミックスワンダーランドデラックスパフエ（えげつないサイズ）を置く。

「私がここに来てパフエを頼んだということは事件が起きたということよ」「なぜかしたり顔のリリエールちゃん。  
可愛<sup>かわいい</sup>い。

「当店のパフエは期間限定商品でありんす」「そもそも今日初めて注文されたでやんす」

「……………」ふてくされてパフエの山を崩し始めやがるリリエールちゃん。可愛くない。

しばし食べてから、リリエールは、

「情報屋<sup>リーカー</sup>と会うのは初めてだったわよね。こっちの白いのがシロナ。こっちの黒いのがクロエ。どっちもこの国の人のことなら大抵知っている情報通よ。人を探すときはたいていこの二人に頼めば万事解決よ」

と、双子に札束をポイと渡した。

「わあいお金でありんす」白髪のほう——シロナが指先をはじきながら札束を数えて、

「あなたが戒祈屋かいきやリリエールの新入りのマクミリアでやんすな？」と黒髪のほう——クロエが僕を見つめた。

「……いやまってなんで僕のこと知ってんの？」  
僕たち初対面ですが？

「だってわっちたちは情報屋でありんす」「この国の人のことなら大抵分かるでやんす。……つーか今そう説明してたでやんす。お前さては馬鹿でやんすな？」

「……………」

なんで僕罵倒ばとうされてるんだろ……。……。

「もちろんあなたのことともわっちたちは知っているでありんす。あなたはマクミリア。領域都市運営の孤児院で生まれ育って、十四歳で独り立ち。それから三年くらい色々な職を転々としながら生きてきたでありんす」「最近の趣味は週に一度、孤児院の子供たちに自分の趣味を押し付けることでやんす。周りに自分と同じような趣味嗜好の本を読んでもくれる人がいないから、子供たちに読ませて自己満足に浸ってるでやんす」

「……………」

「合ってるの？」

なんか興きょうみ味津しんしん々のリリエール。

「腹立つくらい合ってる」

なるほど二人の實力は確かに本物らしい。ふあつく。個人情報ダダ漏れじゃないかひどいや。とも思ったのだけれど、よく考えたら祈れば何でも叶う国の中、こんな双子がいたところで確かに不思議はないかもしれない。

「いえーいでありんす」「いえーいでやんす」  
揃って無表情のダブルピースを浮かべる双子。

「ま、雑談はこれくらいにして」「リリエールは二人にさらに紙切れを渡した。「カジノで事件が起きたの。その犯人のこと、調べてくれないかしら——詳細はこの紙きれに書いといたわ。このあたりで魔女のコスプレが趣味の女の子とかいない？」

「ふむふむ」「なるほど」

二人は仲よく紙切れの端っこを互いにつまみながら、しばし黙った。

そして、

「該当なしであります」「こんな特徴の子は知らないでやんす」

とテーブルに置いた。

知らないとな？

「……急に二人の能力が疑わしくなったんだけど」

「自慢じゃないけどわっちはこの国の住民のことなら完全に網羅しててあります。でもこの特徴の女の子は知らないであります」「やんす」

「……じゃあ、カジノの連中は集団で幻覚を見てるのか



な」

「んなわけないだろ貴様は現実見ろでありんす」「やんす  
う」

「……………じゃあ、外から来た魔女、とか」

「この国に魔法使いは入国できないでありんすよ」「やんす  
」

「……………え、マジ？」

「そんなのも知らないんでありんす？ この国で魔法使い  
が見られないのは魔法使いの入国が禁じられているからで  
ありんす」「やんすよ」

「……………いやまって。魔女が定期船に忍び込ん  
だ可能性も」

「魔女ともあろう者がそんなことするはずないでありんす」「やんやんす」

「ああああああ謎は解けた！<sup>なぞ</sup> 犯人は魔女の変装をした外国の女の子だ！」

「答えにたどり着くのが遅いでありんす」「やんすでやんす」

すべて二人に冷静に反論されて、もうなんかヤケクソだった。クロエに至ってはやんすしか言っていないけどね！

僕たちの会話が一区切り終えたところで、リリエールは「恐らくその通りね」と口を挟んできた。よく見たらえげつないサイズのパフエが半分以上崩落していた。食うの早すぎませんか？

「私が推測するに、この事件の犯人の女の子は、定期船でこの国まで来た女の子よ——何の目的かは知らないけれど、国に来た瞬間に大聖堂で祈りだいせいどうを叶えたみたいね。それでいて、ギャンブルで金を稼ぎまくったと」

「でも定期船に乗り込んでくるのは金持ちばかりですよ？ カジノで荒稼ぎしなけない理由がどこにあるってのさ」

「それはほら、アレよ」

「アレとは」

「……自分で考えなさい」

「……」つまり分からない、と。なるほどなるほど。

「けれど、それにしても魔女の格好をわざわざしている理

由も分からないね」

「それはほら、アレよ」

「……アレとは」

「可愛いから」

「確かに魔女の格好は可愛いでありんす」「萌<sup>も</sup>えるでやんす」

なんだろう一寸たりとも納得いかない。

この国には魔法使いと呼べる者が存在しないというのならば。

そもそも魔女の格好などしていたら目立って仕方がないはず。外から来た子だというのはなら金持ちのはずだし、金を稼ぐ必要すらないはず。

今しがた立てた推論では、まるで必要のない手間をわざわざ  
わざにかけている七面倒くさい犯人像しか浮かび上がらない。

「ともかく」「リリエールはスプーンをくるくると回したの  
ち、パフエの山に刺した。「現時点で分かることはただ一  
つよ——相手は何を考えているのかまるでまったく分か  
らない」

「……………」

「慎重に事を運ぶこととしまじょう」

パフエの山をぎゅぐゅと崩していくリリエールだった。

そして、

「ところでマクミリア。私はこのあとパフエをあと二つほ  
ど追加注文してから行くから、先にカジノに行つて、例の

女の子に接近してくれないかしら。あなたが相手とお友達になつたあとなら、私も相手に接触しやすいわ」

「要するに囧おとりでありんすな」「やんすね」

「えーやだよ面倒くさい」

「そう言うと思った——だからこれあげるわ。好きに使つてもらつて構わないわよ」

リリエールはテーブルの上で封筒を滑らせ、こちらに寄りこした。

分厚い封筒だつた。

開いてみると金がたんまり入つておられた。たぶんさつきのバッグに入っていた金の一部。

「僕、カジノ、大好き」

「それはよかった。うふふふ……」

「へへへへ……」

「こいつら金に汚いでありんす」「薄汚れた大人の匂いがするでやんすな」

僕は幸せにまみれて、リリエールも幸せだった。これぞういんういんの関係といえるね！ とうか金に汚いとか双子に言われたくないかな！

……。

しかしながら僕の頭の中では、やはりカジノで荒稼ぎをしている女の子のことが引っ掛かっていた。

僕はテーブルにある紙切れに視線を落とす。

どうして魔女の格好なんてするんだらう。

灰色の髪と。黒のローブ。それに黒の三角帽子。

まるで本の中の魔女みたいな、本の中から出てきたかのような格好に、いったい何の意味が込められているのだろうか。

……………。

ま、とりあえずこの金を三倍くらいに増やしてから細かいことは考えようかな！ えへへ。

○

まぶしいほどに輝く金色にまみれた店内だった。

まるで宮殿を丸ごと借りてきたような絢爛けんらんな店内には、



まばらながらに人——人間と、魔族と、じゅうじん 獣人——の姿がある。

ルーレットがからからと回り、ディーラーがかたい 華麗な手さばきでカードを配り、サイコロがボードの中を転がっていた。

華美な室内では俗にまみれた大人たちが金と欲におぼ 溺れていた。歓声と悲鳴が喧騒けんそう の中で入り乱れていて、どういいうわけかその場にいるだけで気分が高揚した。脳から変な汁が出そう。

「……ぬ」

僕は騒がしい店内をほどほどに進み、ポーカーのボードまで赴いた。人々の阿鼻あび 叫喚きょうかん が飛び交う絢爛な店内で、

そこだけやけに重苦しい雰<sup>ふん</sup>囲<sup>いき</sup>気を立ち込めている。

四方を本一冊ぶん程度の外壁で囲んでいるボードの中からはチップの山が誇らしげにひよっこりと顔を出していた。積み方を誤ればすぐにでも雪崩<sup>なだれ</sup>を起こしそうなくらいに積み重なっているチップたちの傍<sup>かたわ</sup>らに腰を下ろしているのは、一人の少女。

それは紛<sup>まぎ</sup>れもなく、彼女だった。

「――残念、フルハウス」

ちようど勝負がついたころのようだった。

彼女は飄<sup>ひょう</sup>々<sup>ひょう</sup>とした様子で自らのカードを晒<sup>さら</sup>し、横に座る魔族の男に絶望を与えていた。男はそのときチップがなくなつたようで、「ぶざけんな畜生！　こんなやつてら

れるか！」と立ち上がり、僕とすれ違っていく。

「またどうぞー」ひらひらと手を振る彼女だった。

そしてチップを一枚ずつ丁寧に重ねながら優しげな表情を浮かべる魔女さん。

「ちよろいですね」

おっと。優しげというより卑しげいやといったほうが正しかったかも。

「どなたも弱すぎです。つまらないです」彼女は最後に残った一枚をつまみ、手で弄りながら、独りごちる。

一方的な勝負の展開に退屈している様子であることは傍はたから見ても明らかだった。

「……………」

これもう急接近のチャンスだよね。

僕は今しがた空いたばかりの席に腰を下ろす。

「や。どうもこんにちは。僕はマクミリア。お相手していいかな」

「ええもちろん。どうぞどうぞ」

彼女はにこやかに僕を迎えた。むしろ「ふふふ新しい力モが来ましたね。やったぜ」とでも言いたげな感じの雰囲気だった。

「私はイレイナです。どうも初めまして。ポーカーの経験者ですか？」

「カジノでいきなりポーカーを始める初心者がいたらそれはもはや無謀を通り越してただの馬鹿だと思うな。もちろん

「僕は経験者だよ」

「そうですか。でも皆さんそう言っって私にボロ負けして帰っっていくんですよ。不思議ですな」

「ふふん。僕はそうならないけどな」

「皆さんそう言っって以下略」

「ちなみに僕は強いよ？」

「皆さん以下略」

「……………」

「ちなみにお金はどれくらい持ってきていますか？」

僕はテーブルに封筒を置いてみせた。

その厚さからおおよその金額を察したみたいで、彼女は「へえ……………」とじろやらしい笑みを浮かべた。「ふふふあの大

金がもうすぐ私のものに……」とか思ってたそう。

「ふふふあの大金がもうすぐ私のものに……じふふ……ふふ……ふふ……ふふ……ふふ……ふふ……」

むしろ言ってさえいた。あとなんか顔色が完全に裏金を受け取った悪い役人のそれだった。

もうちよつと心の声と表情を抑えたほうがいいと僕は思うな！

「無駄話もほどほどにして、とつとと始めようか——僕の友達が来る前に勝負を終えたいし」

彼女は頷いた。

しゅしゅしょう

「殊勝な心掛けです。ちなみにお友達はお金を幾らほど持つてくるおつもりですか？」

「さあ？ まあその頃には君のチップはすっからかんにな  
ってるから関係ないんじゃないかな」

「以下略」

「むむ」馬鹿にしておるな？ 僕本当に強いよ？ 泣いて  
も知らないから。

そして僕はテーブルに幾らかのチップを置く。

ふはは手始めにこやつの身ぐるみを剥いでやろうか！

と思っていた時期が僕にもありました。

「フルハウス」「フルハウス」「スリーカード」「ツーパーペア」「ツ  
ーパーペア」「フルハウス」「フルハウス」「フルハウス」「フルハウ  
ス」「ロイヤルストレートフラッシュ」「フルハウス」「フルハ

ウス」「フルハウス」「フルハウス」「フルハウス」

「……………」

その後のゲーム展開といたたらそれはもう涙が枯れるくらいに一方的。

かなり長いこと黙り込んでしまいうくらい。

一方的でありながらもちよいちよいスリーカードとかツ  
ーペアを織り交ぜ、「あれ？　もしかしたら勝てるんじゃない  
ね？」とか思わせてくるあたりも憎たらしい。

「どうしたんですか？　顔色が暗いですよ？　降ります

か？　それともまだ続けます？　ああもちろん降りるなら

有り金ぜんぶ置いていってくださいなね」



うふふ、と笑みを浮かべる彼女。

ポーカーといえれば配られた手札をひた隠しにしながら相手プレイヤーとの駆け引きをする、頭脳戦の要素が強いゲームなわけだけけれど。

むしろ彼女に至っては頭脳とかお構いなしに問答無用でぶん殴ってくるくらいの気概が感じられた。こやつは悪魔じゃ。

「進むも戻るも地獄ですね」

「うううううう……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「誰に向けて謝っているか分かりませんが、諦めるのはまだ早いですよ。ところでチップはあと幾らほど？」

「……あといちまいです」

「それじゃあ勝負になりませんね。困りました」

「うん。だからもう降りー」

「ところであそこに良心的な金貸しがありますが。どいっで  
すか？ ほら、『良心的！ 金利は十日で五割！』ですっ  
て」

「ただの闇金やみきんじゃないかー！ やだー！」

「ごたごた言っでないうでとっすとと金を借りてきてくださ  
い」

「むりー！」

「大丈夫。九日で返せば何も問題ありません。よく見てく  
ださい。十日で五割というよりは、九日までは金利はゼロ

という事です。実質ゼロですよ」

「じっしつゼロ……?」なにそれ甘美な響き!

「何なら例のお友達とやらにあとから借りればいいじゃないですか。ほら、それでもう万事解決ですよ」

「……あとから借りれば、問題、ない……?」

「そうです。問題ないんです。それにほら、今から挽回ばんかいすれば今すぐ返せますよ? むしろお金が増えちやうかもしれません」

「ふえちやう……?」

「増えちやうかもですよ。だからまだ続けましよう?」

ね? 私、あなたともっとポーカーしたいんです」

「……」

「あなたはまだ続けたいですか？」

「つづけたい！」

「じゃあ一緒に借りに行きましようか？」

「うん！」

そして僕はありつたけの金を借り――。

「つて騙だまされるかあああああああああああ  
っ！」

荒ぶる僕だった。

これ完全に泥沼に嵌はまるパターンだよ。冗談じゃないよ！

「誘導にまんまと引っ掛かったりいきなり怒り出したりわけ分かりませんね。猛獣ですか」

「うるさい！」吠える僕。

「しかしあなたが既に戦えなくなっているのは事実です。諦めるか借金するか選んで下さい」

「ぐぬぬ……」ごもつともすぎる。

「どうします？ ああ、ちなみにこのお店では身に着けているものを担保にしてもいいそうですよ。今までも何人かの男が身ぐるみ剥がれていましたし」

「うんそれは知ってる」

「というかそう仕向けたのってきみだよね。」

「ちなみにまだあなたとゲームをしていたいというのは事実です。あなたがもしも身に着けているものを担保にするというのなら、一度くらいは負けてあげてもいいですよ」

「……ぐぬぬ」

「担保に懐中時計とかどうですか？ そのポケットに入ってるやつ」「ちらりと彼女は視線を降ろす。「チエーンしか見えませんが、売れば結構値が張りそうですね」

「……これはダメ。絶対ダメ」

「？ 大事なものなんですか？」

「親の形見だよ」「孤児院に僕が置かれたとき、これが一緒に置いてあった、らしい。」

「……」彼女は一瞬だけ目を伏せてから、静かに僕の肩に手を置いた。「あとで取り返せば問題ありませんよ？」  
気づけば滅茶苦茶めちやくちやにつこりとした笑みを浮かべてた。

貴様は悪魔か。

じつとりとした視線を返す僕に、彼女は、

「というのは——まあ、さすがに冗談です。では別のものを担保にしましょう。手始めにそのキャスケットとかどうですか？ べつに無くても困らないでしょう？」

と、僕の頭をちよんちよんとつついてきた。  
むむ。確かに。

これでゲーム続行できるのなら安いものかもしれない。  
べつに貴重品ってわけでもないし。

僕は軽く頷き、キャスケットを脱いで、そしてテーブルに置いた。

「じゃあこれを担保に——」

「待ちなさいマクミリア。畏おそれよ」

横から視界に飛び出してきた手が、僕のキャスケットを頭に戻した。

リリエールだった。

「一度くらいは負ける——なんて言っているけれど、信じちゃだめよ。いつどこかで負けるとは言っていないわ。あなたが下着だけにされるまで負けないつもりでいるかも」

「そういうことか！」

やっぱり悪魔だ！

「というかどうしてそんな単純な裏すら読めないのかしら。残念すぎて言葉もないわ」

「……………」

沈黙する僕を後目しりめに、リリエールは視線をずらす。



「私の連れ合いを虐めるのはそのくらいにしてくれるかしら。魔女さん」氷河のよう冷たい瞳は、イレイナに注がれた。

「あなたがマクミリアさんのお友達ですか。お名前は？」

「リリエールよ。よろしく魔女さん」

「イレイナです。よろしくお友達さん」

「そこに重なっているチップ、返してくれるかしら。元々は私のお金なの」

「ではお金を掛けて取り戻してください」

「そうさせてもらおうわ」リリエールは僕の肩に手を置いた。「どうかわけだから邪魔。どいて」

僕が温め続けた席に腰を下ろし、むすんとするリリエール

ル。僕は彼女の耳元に、□を寄せた。

「……ねえ、勝算あるの？」

「当然よ」彼女も僕にならって声をひそめていた。「あなたが一方的に嬲り殺しになったあとに子供みたいにわめいていた時にね、こっそり彼女に罹った祈りを解いておいたわ。つまりもう彼女はギャンブルで全勝はできない」

「ほうほう……ん？　ちよつと待って。いつ来た？」

「わりと序盤に」

「……あのう。その時点で祈り解いてくれてもよかったんだよ？」

「ごめんなさい。フルハウス連発されて涙目になってるあなたに面白かったから、つい」

せめてもう少し申し訳なさそうな表情をしてみても如何だろうか。

リリエールは平然とした顔のまま膝の上にバッグを乗つけた。五千万入るやつ。

「さあイレイナさん。ゲームをしまししょうか。私かあなたの金が尽きるまで」

「つまりそのバッグのお金を私にくれるという事です  
ね？ わあい」

「ふふ……たわごとを言っているのも今のうちよ。私はカジノの必勝法を知っているの。あなたなんて簡単にけちよんけちよんにでぎるのよ」

「そうですね。以下略」

そしてリリエールは紙幣をテーブルに置き。

イレイナはチップをかけた。

ディーラーがカードを配る中、僕はこっそりリリエールに声をかける。

「……ねえ必勝法ってなに？」

「私は生まれてこのかたギャンブルなんてしたことないけれど——勝ち方は分かるわ。かけ金を倍々にしていけばいいの。そうすればいつかは所持金がプラスになるわ。これがギャンブルの必勝法」

まるでそれが自分のみぞ知る真実とばかりに得意げな表情で机上きじょうの空論を語るリリエールちゃん。可愛い。

「……ねえカジノに来たことあるの？」

「もちろん今回が初めてよ」

「ポーカーは」

「もちろん今回が初めてよ」

「……」

無謀だ……。

無謀を通り越してもはやただの馬鹿だ……。

うづうづ……これもうダメだ……ごせんまんが消える未来しか見えない……。

○

「フルハウス」「フルハウス」「スリーカード」「ツーペア」「ツ  
ーペア」「スリーカード」「フルハウス」「スリーカード」「フル  
ハウス」「ワンペア」「フルハウス」「フルハウス」「ツーペア」  
「ツーペア」「ツーペア」……「ツーペア」……「ツーペア」  
妙だった。

いろいろと妙だった。

祈りを解いたというのに、イレイナは当然のように勝ち  
続けていた。祈りが効果を為さなくなっただというのならば、  
少なくとも彼女の手ができあがらずに心理戦に持ち込む展  
開もあり得たはずなのに、その様子は一切なかった。

いくらリリエールが素人しろうとといえど、一勝くらいできても  
いいはずなのに、それすらなかった。

しかしながらイレイナの勝ち方はどんどん地味になって  
いって、勝負が長引けば長引くほど、ワンペアやツーペア  
といった、まあ普通に出せるような役ばかりになっている。  
非現実な勝ち方から、堅実な勝ち方に変わりつつあるよ  
うに思えた。  
変だった。

どこことなく違和感が渦巻いていて、けれど違和感の正体  
を僕は言葉にできずにいた。

そして最も妙なのは、イレイナの表情だった。

「……………」

彼女は自らが積み上げたチップの山と、リリエールの膝  
の上にあるバッグを見比べていた。悩ましげに眉まゆを八の字

にしながら。

いったい何を考えているのか——。

「どうしたのかしらイレイナさん。だんだんと手が弱まってきたているわね」

「……挑発のつもりですか？」

「事実を述べているの」

「……べつに、何でもありません。あなたの資金の残りを心配して差し上げているんです」

「ふうん——」

安い挑発の応酬の最中にも、二人はチップをテーブルに置き、ディーラーはカードを配る。

イレイナは自らのカード二枚を確認すると同時に、チッ



プの山から一部だけ取り出して、「ベット」とテーブルの中央に添える。

リリエールは「コール」とイレイナと同じ数のチップを添えた。カードは見てない。見るよ。

気が付けば二人の抱えるチップの数は同等にまでなっていた。といつてもリリエールは所持金から切り崩したただけであり、僕や他の客から根こそぎ奪っていったチップによって積み上げられた山とは重みがまるで違っただけ。二人がチップを置いたことで、テーブルに三枚のカードが並べられる。

手元に配られた二枚とテーブルの三枚で自分の手の良し悪しを見極めるのがポーカーの第一ラウンドである『フロ

チップ』だ。テーブルに四枚目が置かれる『ターン』と、五枚目が置かれる『リバー』まで進むためには先ほどの二人のように同額のチップをかけ続けるか、もしくは全員が一枚もかけなければいい。

互いの手札を開く『ショーダウン』が行われるのは、勝負の最後。それまでは自分の手が相手よりも強いのか、弱いけど相手を蹴落とすために虚勢を張って高額ベットするのか、素直に降りるのか、この勝負は続けても勝つ見込みがあるのかをひたすら考え続ける。金を投じながら。こうした心の読み合いのうえで、最後までかけ続けた者、もしくは最後の最後で勝った者が、テーブル上のチップをすべて奪える。

ポーカーは一見して単純そうなルールの裏にプレイヤー同士の複雑な思惑が交錯するから初級者には向かないのだ。リリエールとの勝負を始めた直後のイレイナはかなり強気だった。毎回のようによろしくダウンまで持ち込み、当然のようにフルハウスもしくはロイヤルストレートフラッシュで上がる。そしてチップをいただく。

けれど今は見る影もなく、  
「……ベット」

と、申し分程度のチップを重ねて置くだけ。かなり弱気になっていた。

「ふふーレイズ」

対してリリエールはあり得ないくらいに強気だった。

ちなみにベットに対するコールは、同額かけることを意味して、レイズは、それ以上のチップをかけること。リリエールはチップの山を全部そのままテーブルに置いた。

「……………」

金の力でレイナを黙らせていた。

この圧倒的な自信の強さという点では、二人のプレイスタイルは非常に似通っている。

レイナが問答無用でぶん殴るプレイスタイルならば、リリエールは札束で顔をひっぱたくプレイスタイルだろう。……………。

何を言ってるのか自分でもよく分かんなかった。

「……さあどうしたのイレイナさん。降りるの？ それともまだ続ける？ ちなみに私の手は相当強いわよ。現時点で既に私の勝利は見えているわ」  
うそつけ自分の手札見てないじゃん。

毎回僕に「ねえ、これって役できてる？」「ってショーダウンになってから確認してくるじゃん。そして毎回惨敗してるじゃん。」

「……………」  
しかしイレイナはまたも苦しげな表情を浮かべるのだった。

何かを深く深く考え続けていると——見ようによつては単に体調が悪そうにも見えた。

「さあ、どうするの？ イレイナさん。勝負する？ それとも降りる？」

リリエールはイレイナの傍らに重なった山を見つめていた。

チップの数は紙幣に直すと、おおよそ千万レインといったところ。

勝てばすべてが手に入るが、負ければすべてを奪われる。

リリエールの圧倒的な財力を前に、イレイナは今までちまちまと貯めていた金を投じて戦わなければならない。

勝てば勝つほどー続ければ続けるほど、負けたときのリスクは跳ね上がる。

……。

もしかしてこの展開を見越してあえて倍々にかけてたの？

無謀を通り越してただの馬鹿とか思ってますみませんでした。やっぱり世の中金ですよ。へへへ。

「さあどうするの？ 早く決めて」リリエールが急かし。

「……むむむむ。うううう……」イレイナが頭を抱える。そして。

大金をかけた戦いが膠着状態こうちやくに陥おちいって、しばらくの時間が流れたときだった。

「全員そこを動くな！」

カジノの扉が、轟音ごうおんと叫喚きょうかんによって開かれ、物々しい

武装をした集団が入ってきた。

たった一瞬でしんと静まり返った店内の中、荒々しい足音と、先頭を歩く男の声だけが響く。

「我々は領域都市保安局！ここに国外から侵入してきた魔女がいるとの情報を入手した！よってここを調査させてもらう。——貴様ら。くまなく探せよ」

連れ歩く保安局員たちに目配せを送る。

ぞろぞろとやって来た保安局の連中は、蜘蛛くもの子のように店内に散った。

兵士の一人がここにたどり着くのは時間の問題だろう。

「あら大変。外から来た魔女ですって。——いったい誰のことかしらね？ イレイナさん」

「……………」



「もしもあなたが本物の魔女だというのなら、大変ね。保安局の連中は人権なんてまるで考えないおぞましい連中よ。もしかしたら死ぬまで拷問ごうもんされるかも」

「え？ 僕、前に捕まったことあるけど、ごはん奢おごってもらったあとに釈放され——痛い！」言葉の途中でリリエールに足を踏まれた。なににするやめろ。

「ねえイレイナさん」リリエールはイレイナに身を寄せた。「あなたの正体も境遇も知っているわ。どうしてあなたがここにいて、金を稼いでいるのかも。すべて知っている」「……ほう。あなたは全知全能のお偉いさんか何かなんですか？」

「違うわ。でもあなたのことは知っている」

「私はあなたに逢ったことはありませんが」

「今ここで虚勢を張るのはやめなさい。賢明とはいえないわ」

「……………」

「教えてあげる。今、あなたに残された道は二つよ」

リリエールは指を二つ立てる。

そして一つを折り、

「まず一つ目。ここで魔女としてあなたは捕まり、檻おの中へとさようなら。あまりお勧めはしないわね。私も後味が悪くなるし」

「……………できれば避けたいですね」

「でしよっわね」

そして彼女はもう一つを折る。「二つ目。今の勝負を放棄しなさい。そうすれば、私が全力で助けてあげる。そのうえで、あなたが国の外に出られるように協力してあげる」

「……三つ目とかはないんですか。私がこの勝負で勝って、国の外に出るとか——」

「この状況で勝負が続けられると思って？」

「……………」

二人が一体何を話しているのかは、よく分からなかった。イレイナは物語に出ている魔女のコスプレをしているだけの女の子で、本物の魔女ではない——はずでしょっ？

「一体どういふこと？」

僕が首を傾けると、リリエールは大げさに呆あきれてみせた。

「……あなた、あれだけ私たちの勝負を見続けていて、まったく気づかなかったの？ 私

が解呪したはずのイレイナが勝ち続けていることに、何の疑問も抱かなかったの？」

「え、うん。リリエール弱いな——って思っ

て——痛い！」

足を踏まれたのは本日二度目。やめろつ

つてんだろ。

保安局員たちの気配が近づく最中さなか、リリエールは立ち上

がった。

「時間がもつたいたいから、簡潔明瞭に説明してあげる。

イレイナさんはね——コスプレなんてしてないの。外から来た正真正銘の魔女なのよ。不幸にもこの国が魔法使いの入国を全面的に禁じていることを一切知らずに、入国し

てきてしまったのよ」

「えっと……？「ぐめんどうひらひら」よ？」

首をかしげる僕。

しかしリリエールがその場で僕の疑問に答えることはなかつた。

「降ります」

イレイナが、吹っ切れたように息をひとつ吐いて、勝負を放棄していたから。

「賢明だわ」

リリエールは頷く。

そして、

「じゃあ行きましょつか」

と、胸からペンを出し、僕ら三人を包むように、床に円を描いて見せた。

「何してるんです？」とイレイナ。

「この国には祈りと呼ばれるものがあってね、祈りは人や物に作用するのよ。このペンはその作用を受け継いだ一つよ」

「ほう」

「このペンには二つ機能があるのよ。一つ目の機能は特に凄くすてね——描いた円を経由じゆでできるの。たとえばこんな場所で床に円を描くと、こうなるの」

彼女がそう言った直後だった。

絢爛な情景が一瞬にして掻かき消えた。

気が付けば僕たちは双子のいる喫茶店の中で立っていて、しばらく視線を泳がせたのち、僕たちが瞬間的に場所を飛んできたのだと知った。

……なにこれ超便利！

「……凄いですね。魔法よりも便利かもしれません」  
店内を見渡し、イレイナはぽつりとつぶやく。

「ただの下位互換よ」

リリエールは自嘲じちよう気味に笑っていた。

とこころで。

「二つ目の機能は何なの？」

「文字が書けるわ」

リリエールは自慢げに笑っていた。

○

それから喫茶店で語られたのは、魔女の真実だった。

イレイナこと灰の魔女さんは、世界各地を渡り歩く旅人だったそうだ。

ある日、とある国に訪れたときに、金持ちばかりが降りてくる船があるのを見つけた。

船で向かう先は、金持ちがこぞって行きたがるようなりゾート地に違いないと彼女は推測した。きっと宮殿や民家が金でできてる凄い国がそこにあるに違いないとも思った。



何という名の国なのかすら分からなかったけれど、ともかく金の気配を感じ取った。

ちようど財布が寂しくなってきたのを感じていた彼女は、「これはもう行くしかないですよ。えへへ」とその場で自らの姿を魔法でネズミに変えて、船に忍び込んだのだ。

「……魔女ともあろう方がそんなことするなんて信じられんであります」「きさま本当に魔女か？ でやんす」  
三人ぶんのコーヒートをテーブルに運んできた双子が軽くシヨックを受けてた。

昔、図書館で読んだことがあるけれど、魔女というのは確か、魔法使いの中でも最高位に君臨する超偉い人たちのはずだけれど、なんだか目の前のイレイナは妙に俗っぽか

った。最高位らしくない。むしろゲスい。クズと言っても差し支えない。

ともかく、かくして船に乗り込んだ彼女は、航海中、金持ちに紛れて過ごした。

数日間にわたる航海の中、彼女は高級料理にご満悦になりながら、ぼんやりとこれから訪れる国に思いを馳せていた。

そして、船は領域都市にたどり着く。

船を下りた彼女が見たものは、それまで訪れたどの国よりもごちやごちやとしていて、混沌こんとんとしていたそうだ。

「魔族と人間と獣人が仲睦まじく暮らしている国なんていままで見たことありませんね。たいていは文化の違いから

軋轢あつれきが生まれるものなのに」

ブラックコーヒーを一口飲んで、彼女は語る。

角砂糖を次々とコーヒーの中に落としながら、リリエールは頷く。

「そして、この国にたどり着いたあなたは違和感に気づいたんじゃないかしら。この国はあなたが想像していたような素敵な国ではなかったはずよ。ただ人種が多様的であるだけ」

「そうですね」

「だから三日程度で出ようとも思ったはず」

「その通りです」

「けれどできなかつたのよね」

「……………」彼女は嘆息を漏らす。「ええ」

ネズミに姿を変えて忍び込んだというのならば、また同じ方法で国の外に帰ればいい。

けれど彼女は、そうすることができなくなっていたという。

「不思議なことに、この国に入ってからというものの、私は徐々に魔法を行使できなくなっていました。たとえば自らの姿をごまかすような魔法というのは、かなりの難度と、それなりの魔力が必要なのですけれど、どういうわけか、訪れたその日から単純な魔法しか使えなくなっていました」

魔法が上手うまく使えなくなった彼女は、別の方法で国の外

に出るために画策することにした。

金を稼いで船に乗ればいい。

「それでカジノに行っただってわけね……ははあ、なるほど」

なんとも単純ないきさつだった。

簡単な魔法しか使えないといっても、カジノで荒稼ぎすることは不可能じゃなかった。彼女は魔法でポーカーのカードを弄り<sup>いじ</sup>、絶対に勝てるように調整した。

カジノには幾つものゲームがあるわけだけけれど、その中で彼女がポーカーを選んだのは、ポーカーが唯一、運でなく実力で勝つ要素を含んでいて、且<sup>か</sup>つ、相手が人だからだった。

運の要素で勝つようなルーレットやクラップスで連勝を続けてしまうと、店側から即座に目をつけられて、出禁できんになる可能性が十分にあつた。

プレイヤー相手に大儲もうけすれば、店が受けるダメージは少ない。摘発される可能性は少ないように思えたのだそう  
だ。

まあ結局、支配人はイレイナの常勝ぶりに絶望して、リリエールの店に来たわけだけけれど。

「魔法を使つて連勝して、定期船のチケット代を稼ごうと  
していたあなたは、途中でこの国の真実に気づいたはず  
よ」

「……ですわね」イレイナは小さく頷いた。

「?」意味が分からず、僕は首を傾けてしまう。

国の真実? 何のことぞ?

「マクミリア。いい機会だから教えてあげる——けど、くれぐれも、この話は誰にも漏らさないで頂戴。これは私たちだけの秘密よ」

リリエールは砂糖たっぷりのコーヒーを飲んだあとで、身を乗り出し、声を沈め、

「この国はね、魔法使いがないんじゃないの」「そして語る。」

「存在できないのよ」

○

「昔話をしましうか。」

大昔、大魔法使いが一人いた。

男は世界平和を何よりも望んでいて、人と魔族が手を取り合つて暮らせる国を造りたいとかねてから考えていた。

平和のための国造りのために、彼は、とある島に目をつけた。

そこは魔力のるつぼのようになっていて、底知れない魔力が地下から湧き出る、不思議な島だった。

島の存在を知つてから、男はその島にすぐさま渡り、魔力の研究を始めた。

数年、あるいは数十年もの間、彼は研究していたかもし



れないわ。

途方もないほど長い時間を経て、男は島から湧き出る魔力の研究を終えた。

魔力の性質を、島の中でだけ変質させることに成功したの。

魔法などという便利すぎて危険な存在があるからこそ、争いが絶えないのではないか。力があるからあらゆる種族間で争い合うのではないか。

男は魔法を忌避きひしていた。

だから、島から湧き出る魔力を、魔法が使えないように別のものに作り替えた。

それが祈りなの。

大聖堂で祈りを捧げると、ごく稀まれに聞き入れられて、願いが叶う——といつのは、マクミリアでも知っているわよね。

男は人と魔族が歩み寄りやすい環境のために——島に來た者たちが互いの共栄を願い、叶えることができるよう、このシステムを作り上げた。

そして、男は完成したシステムの上に、大聖堂を築き上げ、祈りを捧げた。

——どうかこの国が、人間と魔族、それと獣人が手を取り合って住まうことのできる平和な国になりますように、と。

そして願いは、叶えられたの。

国に多くの種族が集まり、今や世界そのものとも呼ばれるほどになった。

男の名前はクラウスレイン。

この国を——島を、魔法が行使できない領域に作り替えた創始者よ」

それが真相だった。

だからレイナは時間が経つにつれ、ポーカーを続けるにつれ、徐々に弱くなっていたのだらう。

「今はもう魔法なんてまったく使えなくなっています。さつき使い切っちゃったみたいで、まるで魔力が湧きません。どうぞやらその話、嘘偽りはないみたいです」

「ええ——」

リリエールはもしかしたら、モリス支配人に相談を持ち掛けられた時点で、イレイナが外から来た魔法使いであることに気づいていたのかもしれない。

つまりポーカー対決とはイレイナの魔力を枯らせるための策でしかなくて、リリエールは端から解呪なんてしていないということだった。

「ちなみにイレイナ。船のチケット代って幾らだか知っています?」

「三千万レインですよ、確か」イレイナは肩をすくめていた。「誰かが妨害しなければもう少しで稼げたんですけどね……」

「私が守らなければもう少しでお縄だったけどね」ふん、と鼻を鳴らすリリエール。「それに、もし仮に三千万レイン稼げたとして、そのあと一年間どっぴやって過ぐすつもりだったのかしら?」

「は?」

「いえ、だから、チケットを買ってもすぐに乗れるわけじゃないのよ? どっぴやって一年間この国で過ぐすの?」

「……は?」

「今売られているのは来年のチケットよ」

「……え」

完全に顔から表情が消えたイレイナだった。

「当然ながら船に乗りたいなら来年までここで過ぐさなけ

ねばならないわ。金を積んでももちろん通してもらえないわ  
けないし」

「え、ちよつと言ってる意味が分かんないです」

「掻<sup>か</sup>い摘<sup>つま</sup>んで言うつと、あなたあのまま稼いでたら路頭に迷  
つてたわよつて話よ。金を十分に稼いでチケットを買えた  
としても、財布が再び空っぽになった状態では、一年間こ  
こで生きるのは無理。あなたもうただの女の子なんだか  
ら」

「……………」

イレイナはじつと黙りこくっていた。

「ところでイレイナさん。ここで一つ提案があるのだけ  
れ、聞いてくれる?」

「……なんでしょっ」

「実は最近、この国は少々治安が悪くなっていてね、うちの店も人員が微妙に足りないの。マクミリアが新しく働くようになってくれたけれど、もう一人くらい欲しいのよ」  
「ほう」

「どう？ 一年間うちで働いてみない？ そうしたら、あなたが来年、国から出られるように保障してあげる。もちろん、それまでの生活も、不自由なく暮らせるように手を回すわ」

どうせ依頼解決料として一億レイン入るし——と滅茶苦茶小声で呟いたのを僕は聞き逃さなかった。

さては罹ってもいない祈りを解いたことにして支配人が

ら金を奪い取るつもりであるな？

……悪女だ。

「……つまり外に出たければ配下になれと」

「そっぴいっぴいとね。どっぴい？」

「……」

イレイナは考える素振りをしばし浮かべて、ぬるくなつたコーヒーを一口飲んだ。

そして。

勝負を降りたときのように、吹っ切れたように息をひとつ吐いて、応えた。

夜。



イレイナを近くの宿屋に連れて行ったあとの帰り道、僕は横を歩くりリエールのほうを向いた。

「……ねえ。でも、今回の件でちよつと腑ぶに落ちないことがあるんだけれど」

「なあに？」

「どうしてあのタイミングで保安局の連中がカジノに来たのかな？」

すると思い出したように、彼女は「ああ」と手を叩たたく。

「私が通報したのよ。『魔女がカジノで荒稼あらいぎしててヤバい』って。もちろん、入国を禁じられている魔女が国にいるという情報を持ち込まれて、保安局が黙もくっているはずもないわ。すぐに動いてくれた」

「……いつ通報したの」

「パフエたべたあと」

「……」

「あとで連絡をしておかないとね。『あれは見間違いでしたすみません』って」

「でも店内にいた連中が証言するんじゃない」

「大丈夫。金を渡して沈黙を勝ち取っておいたから」  
「……」

さすが札束で顔をひっぱたくスタイル。

でも、つまりそれって。「ぜんぶリリエールの思惑通りに動いていたってこと?」

保安局に踏み込まれたことで、イレイナはあとがなく

なつた。魔法を使えなくなり、あの時点で、既にイレイナはリリエールに頼るしか道がなかった。

僕とリリエールによって、魔力が空になるまでポーカーをさせられたおかげで。

「べつに思惑を巡らせていたわけじゃないわ」

リリエールは闇やみに沈んだ空を見上げた。

どこか懐かしそうに。

「ただ、彼女を迎えたかっただけよ」

○

それから一週間が過ぎた。

毎週末の決まり事のごとく、僕は孤児院に向かっていた。週末の僕の朝は早い。

まだ眠りから醒さめたばかりの街並みはまるで賑にぎわっておらず、むしろ閑散かんさんとしているようにも見えた。

「……こんな朝早くから一体どこに向かうつもりなんですか」

ふああ、とあくびを漏らしながら、イレイナは僕の横で文句を垂たれる。

「子供たちに夢を持たせに行くんだよ」

「私は今すぐ夢を見たいです……」

ここ一週間、魔法を使えなくなっただイレイナは魔女らしい格好をやめて、ただの私服を着て仕事をしてくれていた

わけだけれど、今日のこの時間に限っては、魔女らしいローブを着てもらっている。

「……なんか一週間ぶりにこれを着るとコスプレみたいで  
す」

まあ実際、魔法のないこの国においては確かに紛れもなくコスプレみたいなものだけれど。

「これから孤児院の子供たちに読み聞かせをしに行くから、  
脱がないでね」

「……何を読み聞かせるんです？」

「ん」

僕は手に持っていた本を掲げてタイトルのところに指を置く。好きな本のタイトルを口に出すのは恥ずかしいから

ね。

『『二ヶの冒険譚<sup>たん</sup>』ですか』イレイナは目を丸くしていた。「それ、私も持っていますよ。全五巻」

そして彼女はバッグから五冊全部取り出して、したり顔をしてみせた。

ほんとに全五巻あった。

幻の……四巻と、五巻が……！

「え、ちょっと。それどこで買ったのー！」

「十数年前にとっくに出てましたが」

「マジ？」

「マジです」

「……借りてもいい？」

「もちろん」彼女は柔らかく笑って、僕の手の本を置いた。「特に四巻は楽しめると思っていますよ。この国のことが書いてありますから」

「……？ どのくらいと？」

「この国って、確か領域都市クラウスレイン、ですよね」「そうだけど……」

「ネタばれしちゃいますと、主人公は四巻の序盤でこの国を訪れて、一年間過ごすんです。四巻序盤から中盤までずっとこの国での話を綴つづっています。ご存じの通り、この旅日記は実話を元にして書かれたものですから——まあ、この国の名を知ったときは本当に驚きましたよ」

「……」

「本の著者はこの国で、不思議な女性に出会って、その人の元で一年間働いていたそうですよ。それがどういうお店かは——まあ、読んでれば分かると思います」

「……………」

「魔法が使えなくなっただま……なんてことは一切書いてないんですけどね。すっかり騙だまされましたよ……。そういう国だと知っていたら、もう少しうまくやり方でお金を稼いでいたのに」

「……………」

「ちなみに主人公は不法入国したみたいですよ。ワイルドですね」

「……………」



もしかして三巻までしか持ち込まれていないのって、そういう事情？ 不法入国した魔女の物語が国内で売られていたらいろいろとまずいから、四巻は持ち込み拒否にされていて、四巻がないから五巻も持ち込めないということ？ え？

そういうことなの？

……………。

大人の事情で不都合があつたせいで需要あるのに見て見ぬふりして供給サボるとかこれもう商売の破綻じゃない？ やはり読者をなめておられるな？

「しかし思った通り、ここは楽しげな国ですね。一年間くらいいても構わないかもしれません」

歩みを進め、彼女は僕の前に出た。

僕は、

「ねえ、というか、その魔女が一年間働いてた店って——」

彼女の背中に、問いかける。

イレイナは振り向く。

「リリエールさんは本当に不思議な女性ですよね」  
そして笑った。

「彼女と一緒にいたら、もしかしたら面白いことと出会えるかもしれないね。本の主人公みたいだに」

——ただ、彼女を迎えたかっただけよ。

懐かしそうに語っていたリリエールの言葉が、ふと頭を

かすめた。

街並みを眺めなが<sup>なが</sup>ら僕の前を再び歩み始めたイレイナの瞳は、まるでその時のリリエールの様子と、そっくりだったから。